

---

# 先生と僕

あんみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

先生と僕

### 【著者名】

あんみ

### 【あらすじ】

僕はどこにでもいる、普通の中学3年生。受験受験と先生たちは騒ぐけど、正直あんまり僕らには実感がない。そんな、けだるい10月。でも、一生忘れない10月。登録して初めての作品です。拙いところもたくさんありますが、よろしくお願いします。

## 第1話 出会いと僕

「菅谷くんね…。もう覚えた。絶対忘れない」  
しゃがみこんで、涙田で僕を見上げて、うらめしそうに、先生はそう言つた。

僕は菅谷遼太。1Jく普通の中学3年生だ。

部活を夏に引退してからは、たまに顔を出したりしながら、なんとなく受験勉強の日々。

だけど、正直言つて高校なんてまだまだわかんない。  
なんとなくこの辺かなあ、なんて意識はあるけど、まつきりとした目標なんてのもないし。

そういうもんなんだろつか。どうもんなんだろつか。

そんなんなんとなくけだるげな10月の日々を、友達と一緒にバカやりながらすゞして、そんな時。

教育実習生が、3年1組にやってきた。

「はじめまして、今日から教育実習に来ました秋名つぐみです。  
1ヶ月間つていう短い間なんですが、よろしくお願ひします」  
少し高めの声でそう言つて、秋名先生はぺこりと頭を下げた。

…秋名つて名字、珍しいな。つぐみつてこうな名前も。

だけど、この人に会つてゐる気がする。

少し茶色がかつた細い髪に、白い肌、きれいな茶色の大きい目。うすいピンクの唇。

20をこえた大人のくせに、表情がどこか幼げに見える。

なんか、きれいだけどかわいい。

その辺の男はほつとかないような感じに見える。

それに。

秋名先生はなんだか、きらきらしていた。

瞳、髪の毛、すべてがきらきらしているように見えた。

それで僕は思つた。

「あ、この人ははつきりとした目標があるんだなあ」  
そんなときは、急に自分がどんよりして見えるもんだ。

困つた。

初日はそれつきり、先生と会つことはなかつた。

…と、思つたんだけど。

「あれつ？まだ残つてたの？」

今日中に提出する予定だつた数学のプリントを、拓と一緒にやつてたとき。

秋名先生が教室に入つてきたのだった。

「もう6時だよ？早く帰んなよ」

「やー、今日提出のプリント残つてんすよ」

拓はとても気さくなやつだ。今日はじめて会つたばかりの先生にもホイホイ話しかけていく。

「せんせー、いくつですか？」

「いくつに見える？」

「28」

「…………やうやう、28」

「うそうそ。20とかつしょ？」

「そうやう、20歳」

「あれ、でも大学3年だつたら…21？」

「誕生日きてないだけ。早生まれだからね」

「彼氏は？」

「彼氏ー？ いないい、そんなもん」

「まじで？」

僕の口からはじめて出たのは、彼氏がいなつて言った先生へ、だつた。

先生は僕のほうを見てうん、いないんだよねーと笑い、拓はその後ろでにやつと笑つた。

「せんせー、こいつ朝からせんせーの」とかわいいかわいい言つてたから氣一つけた方がいいっすよ

「あらつ、ほんとに？ 照れるわー」 そういうつて先生はまた笑つた。僕は耳が熱くなるのを感じながら、んなこと言つてねーだろと拓を殴り、

先生に向かつてすいませんコイツバカだから、と頭を下げ、拓を引つ張つてそそくさと教室を出た。

いやでも、彼氏がいなのは意外だつた。

だつて、やつぱり先生は僕の目から見てかわいかつたから。…や、だからつて拓が言つたみたいに朝からかわいいかわいい言つてたわけでは、決してないけど。

秋は、暗くなるのがとても早い。

6時半頃になるともう真っ暗になつてしまつていた。

まあ、だけど僕らは男だから、暗いからどうってこともなくて。拓とは校門を出た後は家は逆方向だから、しばらく校門の前でくだらないことをしゃべってた。

すると。

「あ、せんせーだ」

真っ暗な闇の中、職員玄関から出てきた秋名先生。

それを見た瞬間、拓と僕の間には同時にいたずら心が芽生えた。

息を殺し、校門の前でしゃがんで待つ。

姿勢よく、ちょっと疲れた表情でまっすぐ歩いてくる先生。

カツ カツ カツ カツ

今だつ

「 わつ ！ ！」

「 きやああつ ！ ！」

慌てふためき、へなへなと座り込み、顔を覆つ先生。やべっ、やりすぎたか！？

「あはははははつ」

拓のバカは笑い転げている。

「 い 、ごめんせんせ 、大丈夫？」

とりあえず謝つて、先生の肩に手を置くと。

先生は僕の胸をぐつとつかんで引き寄せ、名札を確認した。

「 菅谷くんね 、もう覚えた。絶対忘れない」

しゃがみこんで、涙目で僕を見上げて、うらめしそうに、先生はそう言った。

ちょ、俺だけ！？

…と思ひう間に、先生はまだ笑い転げてゐる拓のほうにすたすた歩いていつて、僕にやつたように胸をつかんで引き寄せた。

「水島くんね。あんたも絶対忘れない」

かくして、僕たち二人は秋名先生にとつて、最初に名前を覚えた記念すべき生徒となつたのだった。

「…そんなびっくりしたのかな？」

「…うん、多分」

## 第2話 予感？と僕

僕は、クラスの中で一番に来ることが多い。

みんな結構だらしないのか何なんだかわかんないけど、チャイムが  
りざりに来るやつが多い。

だけど僕はあんまり朝あわただしいのは好きじゃないし、朝の空が  
結構好きだから、

はやく起きてゆっくり学校に来る。で、何をするわけでもなくぼけ  
ーっとしてる。

最近は、結構冷えるようになったってきた。

「あー、おはよっ前谷へこ」「あー、おはよー」「やあこます」

廊下を歩いていると、教科書やプリントやらファイルやら、せた  
らといろいろ抱えた秋名先生に会った。

「ああ～、やばいやばいやばいやばい」

見ると、いろんなものがずるずる落ちそつになつてて、先生がもの  
すじくあわてている。

僕はあわてて駆け寄つて、落ちそつになつてるもの下から支えた。

「じめんじめん、ありがと」

「一気にいろいろ持つからですよ」

「…だつてー…めんべくさこじやない、行つたり來たりするの

「ははつ…先生って、たまに先生っぽくないですよね

「ちょっと、どういづ意味？」

「先生としてはまだまだつてコトですかね？」

「…だつて、当たり前だもん…実習生だもん…」

ちょっと[冗談を言つだけで、真つ赤になつてしまひもどりになつてしまふ。

そういう「トコ」が先生っぽくないんですって。

…って言いかけて、やめた。先生の荷物を半分持つて、今は実習生の控え室になつている少人数指導室まで行く。

「ありがとー、助かつた」

「先生今日うちのクラスで授業するんですか?」

最近時間割変更やらなんやらで国語がよくつぶれていた。だから、ほかのクラスのやつはもう秋名先生の授業を受けていたけど、僕らはまだだつたのだ。

「うん。なんか、みんなのことちょっと知つてる分だけすごい緊張する…」

「そういうもんですか?何とかなりますつて」

「そう?じゃあ私が質問したら真つ先に手あげて答えて」

「あ、無理です。国語苦手なんで」

ふくれつ面になる先生を見て、僕の顔は自然と笑顔になる。かわいい。

「何笑つてんのよ。絶対当てるやるからね」

「だからイヤですって」

秋名先生は、国語の担当だつた。

そして、秋名先生を指導する、僕達の本当の国語の先生は、学校の嫌われ者だつた。…国語の先生つていうのは、どうしてみんなにむかつく人が多いのだろう。

どつかの学校から今年來たくせにやたらと態度がでかく、

谷中、英子。

細かいところに目をつけてちくちくちくちく嫌味を言へ、

僕らのことなんか何にも知らないくせに何でもわかってるような顔してゐる。

みんなと同じように、僕も谷中先生が苦手で嫌いな生徒の一人だった。

だから、3年1組ではしきりに、

「秋名先生かわいそひ…」

だの、

「秋名先生までもんな嫌味っぽくなつたらどうする?」だのをわざかれていた。

そして、秋名先生の初授業。

ものつすじぐ、おもしろかつた。

そして、苦手な僕にもわかりやすかつた。

なんか、教科書をパラパラと読んだころは「げ、こんなのやんの?」みたいな、面白くなさそうな単元だと思つたんだけど。

全然、そんなことなかつた。

初めは少し緊張気味だつた秋名先生だけ、拓とかアツが茶化したりなんかしてゐるおかげで、授業の半分をすぎると先生はいつも調子で二コ二コしながら授業をしてた。

ふと後ろを見ると、谷中先生が、面白くなさそうな顔で何かにチェックをつけてる。

うーん…。これから秋名先生は谷中先生にいびられてしまうのだろう

うか。

先生、頑張つて。

僕は意味もなくシャーペンをぐつと握り締めて、  
丁寧に板書された文字をきつたない字でノートに[写]し取つた。

「しつかし、りょーたが年上好みとはなあ」

「あ？」

昼休み、椅子に後ろ向きに座つて僕の顔を覗き込み、にやーっと笑  
うバカふたり。

「好きなんだろ？せんせーのことが」

「…お前らまだそんなこと言つてんの？」

「だつてお前、谷中せんせーのときと秋名せんせーのときと、授業  
の身の入り方ぜんぜん違つた」

「アツだつてすげー集中してんじやん。てかみんなそうじやね？」

「まあ、そりやそんなんだけどさあ」

確かに、谷中先生の授業はつまらないし、嫌味は言われてむかつく  
し、受けれる気なんか全くしなくて。

だけど、秋名先生の授業はおもしろかったし、変なことでいちいち  
怒らないから集中しやすいし。  
それはみんな同じだるつ。

だけど拓とアツは、そんなんじやなくて、僕が秋名先生を氣に入つ  
てるからだつて、そう言いたいんだ。  
この、バカども。

自慢じゃないんだけど、僕は、中3にしたら結構落ち着いているらしい。

自分でぜんぜんそんな風に思わないんだけど、童顔のくせに大人っぽいらしい。

「顔のわりに老けてるってことなんだろうか。いやいや、多分小さい頃からずっと拓やアツと一緒にいるからだろう。そういうことにしどこう。

拓は、水島拓己つていつて、陸上部のエースだった。引退してからも部活にたまに顔を出している。アツは、斐川敦也つていつて、バスケ部。アツもかなり大きな戦力だった。

ふたりとも運動はできて、部活ではかなりすげいやつらなのに、なんだかバカだし能天氣だしイタズラ好きなのだ。

そんなふたりの、度が過ぎそうなイタズラをいつもいつも小さい頃から止める役をやらされて、僕の人格が出来上がったんだと思う。バカを止めるためには、少しごらい落ち着いてるやつがいるといけないから。

剣道部に所属してたころから、ちょこちょこつと女の子に何か言われたりすることも、なかつたわけではない。だけど。

別に女の子とも付き合つこともなく、これまで「」してきましたわけ。好きな子も別に……いなかつたし。

中3の今までそんなんだつたから、このふたりは僕が秋名先生を好きになつたつていう風にしたいんだろう。

「そりや、確かにかわいいと思つよ。秋名先生は」

「おつーやつぱりー？」

「けどさあ、お前ら。相手は先生だぞ？」

「実際は大学生じゃん」

「いやいや、そういう問題じゃねーよ。次元が違つだら。中学生と

大学生じゃ

「乗り越えろーそのぐらー」

「バカ」

： だけど、実際、ふたりが言いたいこともわからなくはない。  
自分の言葉一つで、くるくる表情が変わる先生の顔を見たり、  
授業中とかに田が合つて、先生にふんわり微笑まれたりすると、  
なんだかどうしようもなくすくすくくなつてしまふのも、事実な  
んだ。

秋名先生に会つて、まだ1週間しかたつてないのに。

拓やアツは、ものすごいバカだと思う。  
だけど、僕も負けないぐらいにバカなんじゃないだろうか。

最近、学校が楽しい。

3年1組の32人は、みんなそう思っているんじゃないかと思つ。

「つと、今日は45分授業ですね。そこで、1時間目に歯科検診があるからみんな遅れないようにしましょう」

秋名先生の、いつまでたつても少しも慣れる様子がない朝の連絡もう慣れた。

その後の、大事なところだけはしゃべる担任の倉沢先生の話も。みんながとても生き生きしてるのは、秋名先生がいつも楽しそうにしゃべるからだと思つ。

あ、朝の会の連絡は緊張してへたくそだけど。

秋名先生は給食を食べるのが遅い。

20分あれば給食ぐらう食べられるだろうに、いつも時計を気にしながら焦つて食べて、たまにむせたりして。しゃべりながら食べればいいのに、しゃべるときは絶対手を止めちゃうから、やたらに遅くなつてゐる。

秋名先生の授業はとても面白い。

朝の会はたゞたゞしこくせに、授業はなぜかリラックスしてゐる。…

よう見える。

でも時々「しまった！」みたいな顔をするから、多分何もかもうまくいくつてゐるわけではないのだろつ。

誰かが先生の質問の答えをつぶやくと、ものつすいへりつれしそうな顔をする。

僕も無意識のうちに答えをつぶやいたとき、それが実はとても大事な部分だったりして、

聞こえてるくせに何回も「え？」と聞き返されて、みんなが笑う中大きな声で発表させられてしまった。

…あのときの先生の、いたずらをやり遂げた！みたいな笑顔は絶対忘れない。

秋名先生が実習に来てから3週間。こんなに生徒と仲良くなつた実習生はこれまでにいただろつか。

授業もすこく面白いし。正直、谷中先生の授業より断然わかりやすい。

これがいつかは、あの谷中先生の授業に戻つてしまつと思うとやりきれない思いでいっぱいになる。

国語が谷中先生の授業に戻るとき。

…それは、秋名先生の実習が終わるときだ。

あと、1週間、か。

そんなある日、家に帰つてご飯を食べてから、僕は忘れ物をしたことに気付いた。

理科のワーク。明日提出で、理科の渡辺先生は提出物にとても厳しい。

やばいぞ、これ。

時間は6時45分。まだ学校あいてるかな？

僕は私服のまま自転車に乗つて、真っ暗になつてしまつた道の上、必死にペダルをこいだ。

10分ぐらい走ると、学校が見えてきた。

…あれ？1組の教室、電気がついてる。

誰かいんのかな？こんな時間に。倉沢先生かな？

意味もなく足音を忍ばせて、3階の教室に向かつ。僕がそこで見たものは。

うつむいて、教科書の上にペンを走らせる秋名先生。時折、鼻をする音。

黒板に連なるのは、僕らがまだやつていないとこの授業をまとめた白い文字。

僕は声をかけることが出来なかつた。

先生はまつたく僕に気付く様子はなく、また顔を上げて、手に持つた紙を見ながら黒板に字を書き出す。

今まで見たことのないくらい、真剣な表情。

黒板がいっぱいになつたころ、大きなため息をついて。

「えつーー？」

…入り口で立ちぬくしていた僕に気付いた。

「あつ、あの、俺、忘れ物しちゃつて…」

意味もなく僕は焦り、あわてて教室に入る。端っここの机にガンッと足をぶつける。

「いでっ」

「今とりに来たの？ずっとそこいたの？ぜんぜん気付かなかつた…」

ものつす」へびつくりした顔をして、秋名先生は僕を見た。

目が、赤い…

…先生？

…いや、聞いちやダメだ。

「あ、先生

「ん？」

僕は精一杯笑って、ずっと言いたかったし、みんなも思つてることを言つた。

「俺ね、いつも先生の授業めっちゃおもしろいと思って聞いてるんですよ」

……

……あれ？

僕、

何か変なコト言つた？

「あの、せんせ……」

「……あれつ？」

茶色い目からぽろぽろっと、涙がこぼれる。

先生はそんな自分にびっくりしたみたいだった。

「「めん」「めん、なんでもない」

先生はすぐに涙をふいて、にっこり笑った。

目が赤いこと以外は、いつもの秋名先生だ。

「うれしいこと言ってくれるねー、菅谷くんつてば

「や、みんなそう思つてますよ。谷中先生の授業より百億倍いっすよ」

「ほんとにー? うれしい、ありがとー」

よかったです。

いつもの秋名先生だ。目が赤いこと以外は。

「目が赤いのには、気づいてない」とにじょげ。

「ところで何忘れたの?」

「あー、理科のワークです。明日出すんすよ」

「明日出すのに忘れちゃつたんだ」

「はい」

「おバカだなあ」

「ほんと、こうこう時まじテンショントがりますよね」「わかるわかる。私だったら嫌になっちゃつて取りになんか来ないよ。菅谷くんえらいね」

「いや、理科じゃなかつたら俺だつて取りに来ないですよ」

「提出厳しいんだ? 理科」

「もー、谷中先生レベルつすよ」

「あはは」

「そーだ、先生は谷中先生どつ思います?」

「なに、どうつて?」

「ものつすごい嫌われてるじゃないですか、生徒に」

「でも、悪い人じゃないでしょ?」

「悪い人ですよ! 悪人ですよ」

「もう、そんなことないつてば」

「でもマジありえないんですよ? なんかこないだとか……」

谷中先生の愚痴が止まらなくなつた僕と、それを制す秋名先生のやりとり。

「ほかにも、誰と誰が付き合つてるとか。クラスの中の人間関係。拓や、アツのバカないたずら。」

僕たちの話は続いた。話してゐつけた、秋名先生の目からは赤みが引いてきて。

いつもと微妙に違う秋名先生の笑顔は、いつもと全然変わらない秋名先生の笑顔に戻つてきて。

僕は、何よりもそれが、本当に本当にしきつた。

くだらない話をしてたら、いつの間にか時間がすぎてて。

僕は8時半を過ぎてやつと、自分が帰らないといけないことに気が付いた。

「げ、もう8時半！？」

「あつ、ごめん！話に夢中になつてた」先生もあわてて黒板を消し始める。

僕はそれを手伝つてきれいにしてから、さよならを言つて学校を出た。

僕は意味もなく、どんどんペダルをここでスピードを出す。自転車のカゴに放り込まれた理科のワークがばさばさ音を立てる。夜の風が、心地いい。

僕はきっと、ずっと忘れないんじゃないだろうか。

秋名先生の、真剣な横顔。

秋名先生の、思わずこぼした涙。

秋名先生の、笑顔の中の潤んだ赤い目。

「話に夢中になつてた」

秋名先生の、なにげなく紡いだ言葉。

親友ふたりの、バカな言葉がよみがえる。

「好きなんだろ？せんせーのことが

…拓とアツが言つたとおりになつてしまつた。

やつぱり僕は、ものつすごいバカだ。

## 第4話　迷いと僕

楽しそうに話す明るい笑顔を見るだけで、僕だけでなく拓も、アツも、ほかのやつも。

すごく元気が出る。みんなが明るくなる。

いつもいつも、秋名先生の周りには、誰かの笑顔がある。

すごい、と思う。

ほかの誰にもまねできない力だと思う。

…そういう、人を惹きつける力がある秋名先生には、絶対、教師になって欲しい。

もし、秋名先生のような人に教わることができたら、そいつは本当に幸せ者だろう。

そして、僕たちもその幸せ者のひとりだ。

その日の3時間田は学活で、白齧と二者面談だつた。誰の案だか知らないけど、あと3日で実習が終わる秋名先生へ、メッセージを送るうつていうことで色紙が回ってきた。

…う。なんて書こう。

みんな、先生の授業は面白かったとか、わかりやすかったとか、楽しかったとか、いろいろ書いてる。

僕はバカみたいだけど、特に目を引くメッセージにしたかった。

…だけど、僕はもともと国語は苦手だから。そんなに言葉なんか思いつかなくて。

「今までの実習生の中で一番よかったです。授業もかなりおもしろかったです。

国語はあまり好きじゃなかったけど、先生のおかげで少し好きになりました。

1ヶ月間、本当にありがとうございました。

菅谷遼太

隣の綾瀬が持つてたバカみたいに田立つ蛍光ピンクで、ありきたりの言葉を素直につづるしかなかつた。

「菅谷さあ、何でそんな色わざわざ使つの?」

「いや、変な色だから使いたくなつた」

「なにそれ」

綾瀬はそう言つて笑いながら僕からペンを受け取つたけど、文がヘタクソでも見てほしい…みたいな気持ちで僕が蛍光ピンクなんか使つたことは、絶対わからないだろ?。

秋名先生は何も知らず、

たどたどしく朝の連絡をし、どこかのクラスで授業をし、あせりながら給食を食べ、またほかのクラスで授業。

いつもどおり、何も変わらず。忙しそうに、楽しそうに。まるで、この学校にいつまでもいるかのよう。

…わかってる。先生と生徒が、そういう関係になるのは絶対ありえないってコト。

ましてや教育実習生といつ立場はこの学校とは本来関係ない立場だから、

実習が終わったら生徒と個人的な連絡は取っちゃいけないコト。わかつてんんだ。

中学3年にして、初めて人を好きになった。

もしかしたら初めてじゃないのかもしれないけど、自覚したのはこれが初めてだ。

これは、他の人からすれば遅い方なんだろう。でも、僕にとっては初恋ってやつで。

…だけど、どうしてそれが、絶対に叶わない相手なんだろう。

もし、僕のこの気持ちを、先生に伝えたとしたら、先生はどんな顔をするのだろう。

…やっぱり、困ってしまうんだろうか。

「りょーたあ

「あー？」

「どうすんだよ？」

僕を取り囲むバカ二人は、最近僕のことを茶化をなくなった。今だつて、ほら。

なんだ、この心配そうな目は。きもちわりい…

「どうするつて、何が」

「何がつて、バカ。決まつてんだる」

「あと3日でせんせーいなくなつちまつだぞ？」  
拓とアツが言いたいことはわかつてん。

秋名先生に気持ちを伝えるのか伝えないのか、どちらなんだと。

アツは、好きな女の子…部活の後輩に告白した経験がある。それで、見事付き合つことに成功したのだ。…ま、けつこいつ前の話だから、今は別れちゃつてるんだけど。

拓はそういう経験はない。小6のころに好きだつた子が転校してしまつたからだ。

何も気にしてないみたいに振舞つてるけど、未だにその子のことが忘れられないことを、僕は知つてゐる。

秋名先生のことを本気で好きになつたと、この一人に言つた覚えはないのに。

やつぱりわかつてしまつてたらしい。

あーあ。そんなわかりやすかつたのかな…

「…だつてさあ…。絶対無理なことがわかつて、普通言つか?」

「…うーん…」

「だろ?ほら

アツが、言われてみれば…みたいな顔して黙り込むのを見て、ほつとしたのと同時になぜか少しがっかりする。拓はとすると、拓も難しい顔で黙り込んでしまつた。

「いーの、俺のことは  
「…ほんとに?いーのか?」  
「うん」

そう。いいんだ。

だって、伝えたって秋名先生はきっと困ってしまうだけだから。  
困らせるくらいなら、迷惑をかけるくらいなら。  
黙っていたほうが。

先生のあのときの、「なんでもない」って笑ったときの、潤んだ目  
の中には、

僕には絶対わからない苦しみが隠れていたと思う。

先生にだって苦しいことがあるのは当たり前だけど、  
だけど、

先生には、困るとか、泣くとか、そういうのは似合わない。  
笑っていて欲しい。

5時間目。

秋名先生の、国語の授業が始まる。

「よしつ、始めます！」

「きりーつ」

「れーい」

「ちやくせーわ」

秋名先生は今日も一コースしている。

僕はものすごくぼけつとしていて、授業が始まつてゐるのに教科書も  
ノートも出さないまままでいたらしい。

「ちょっとー、菅谷くんー授業始まつてゐるのになんで机の上に何にも  
出でないのよお」

「え？ あつ

白い田でこらむ先生と、あわてて教科書やノートを引っ張り出す僕と、その周りで起ころる笑い。

「じゃあ菅谷くんにはものっす」「くくく長く教科書読んでもらおつと

「えー！ ちょっと待つてくださいよ～」

「待たない！ えっとねえ、99ページの3行田から101ページの

最後まで！」

「長すぎですよ！」

「だつて長く読んでもらひつつて言つたもん」

「え～、まじかよ…」

「教科書出してないほうが悪いもんねー、ほらつ読んでもるで！」

「あー……えーっと…」

教科書読むの苦手なのに…

だけど、いやな気持ちにならないのは、僕の前で笑つてるのが秋名先生だからだろ？ 谷中先生だったら自分が悪いにも関わらずマジでむかついたに決まつてる。

つつかえながらたどしへ読む僕を、先生は漢字の訂正なんかをしながら根気強く待つてくれる。

やつとのことで読み終わると、にっこり笑つて

「頑張った！」と声をかけてくれた。

自分でもイヤになるぐらい汚い字でノートをとりながら、僕は先生の顔をちぢつと見る。

僕が理科のワークをとりに行つたあのとき、

痛々しいぐらいに真剣な表情で黒板に向かっていた先生。

あのときに書いてたのと全く同じ内容を、

たまに間違えたりちよこつと補足したりしながら、二二二二笑つて

丁寧に書いている。

あ。

ふといつちを見た先生と、目が合ひ。

：先生はちょっと恥ずかしそうに目をそらした。

僕の胸の中で、何か熱いものがじわりと広がる。

：あの表情の意味は、きっとこのクラスで僕だけにしかわからない。

：やつぱり。

僕のこの気持ちなんて、伝えたら絶対、先生は困ってしまう。

先生の困る顔なんて、見たくない。

迷惑なんて、絶対かけたくない。

笑っていて欲しい。

この人には、笑っていて欲しいんだ。

普通1ヶ月といつたらなかなか長いもんだ。  
だけどこの1ヶ月は、とても短く感じた。

わずか1ヶ月の間で、僕の周りはかなり変化したように思える。  
たとえば、夏の間はぜんぜん降らなかつた雨が、1週間もずつと続  
いていらいらしたことや。  
たとえば、暗くなる直前の夕焼けが、ため息が出るぐらいたきれい  
な金色だつたことや。  
たとえば、生暖かかった夜の風が、ひんやりと冷たく、心地よくな  
つたことなんか。

今まで当たり前だと思っていたこと、おおーと思つたり、いら  
いらしたり。

今までなら絶対感動しないような映画に、不覚にも涙が出そぞくな  
つたり。

いつもどんよりしていた自分の心が、実はこんなに透きとあつてい  
たものだったことを、初めて知つた。

そんなことを知るきっかけをくれた人が、今日、僕の前からいなく  
なる。

「つぐちゃん、ずっとこの学校いでよー」

「つぐみ先生いなかつたら超さみしいんだけどー」

「つーん、ずっといたいのはやまやまなんだけじねえ…」

1ヶ月の間で、秋名先生は自然と女子から下の名前で呼ばれるようになっていた。

3年1組だけでなく、ほかのクラスのやつも秋名先生の「じが大好きになっていた。

1週間とか、1ヶ月とか、1年とか。

そういう単位で考えていくと、時間つけてずいぶん長いもののがつら感じるのはじるけど。

1分とか、1時間とか、1日とか。

そういう単位で考えていくと、時間なんでものはじるはじるはじるすきでいく。

あつといつまに給食がおわり、もつ今は昼休みだ。

…と。

昼休みになつた瞬間、僕は拓に引つ張られてベランダへ来た。  
なんか、今日の拓はおかしい。  
ずっと難しい顔をしている。

「りょーた、やっぱ今日会え

「あ? 何が?」

「秋名せんせーに。言わないとダメだ

拓が、珍しく真剣な顔で僕に言つ。

こいつのこんな顔見るのは久しぶりな気がする。

「だから何をだよ

「告れつてんの」

「ぶ…」

いきなり何を言い出すのかと思つたら、告れ、だ?

何を言つてんだ、こいつは。

「だからさあ…言わないって決めたの」

「だからさあ…それじゃダメなんだよ」

後ろ頭をぼりぼりかきながら、もどかしそうに拓は言つ。

「だから…もう会えないってわかつてんだつたら、無理だろうが何だろうが絶対言わないと後悔するんだよ」

好きな子が転校しちゃつたのに、結局告白できないままだつた拓ならではの言葉だ。

…重みがある。

「そうだぞ、りょーた。言つちまえ」

「うつ、アツ…お前いつ来たんだよ」

「今。つてゆーか、もう俺、秋名せんせーに『今日の6時に教室に来てください』って言つてきちゃつたぞ」

…

…は!?

…

「ぐつじょぶ」

「だる」

「ぐつじょぶ、じゃねーよ!…何勝手に、おまえら…」

ぐつと親指を立て、健闘を喜び合うバカふたりをはたこいつとしたその瞬間。

そのバカふたりは、一人してものすごい睨みをきかせて僕にたたみかけた。

「いいかお前、考えてみ？相手は教育実習の大学生だぞ？」

「せんせーにはもう絶対会えないぞ？」

「連絡先も聞けないし、俺らは高校行っちゃう」

「もし文化祭かなんかに来ててくれたとしても、たぶん女子に囲まれて俺らは近づけないで終わりだぞ」

「俺らって今までの実習生のことなんて覚えてなくね？向こうももうかもしれないし」

「俺らのコトなんかきっと『バカなやつがいたな』くらいで終わるだぞ」

「せんせーが学校に来るの、今日が最後なんだぞ？」

「そんでその今日も、もう半分終わってんだぞ？」

…こいつら…言い返せないと思つて何でも言いやがつて。

確かに、こいつらが言つてることは全部、的を射てる。

拓がそうだったように、好きな人に気持ちを伝えられなかつたっていうのは後悔するものなのかもしない。

だけど。

…だけど、たあ。

「…ナゾさあ、言つたつて、困らすだけじゃん。迷惑かけるだけじゃん」

ワケわかんなくなつてきて、二人の目から逃れるように、てんてこ向いた。

そう。

仮に好きだと、秋名先生に伝えたとしても。

こいつらが言つたように、秋名先生は教育実習中の大学生だから。僕はどこない、実習先の一生徒でしかないから。

「なんだお前、そんなこと気にしてたの？」

拓があきれ果てた声を出した。

そんなことってなんだよ。

そう言うより先に、ふたりが口を開いた。

「お前今までどんだけせんせーのこと困らしたり迷惑かけたりしたと思つてんだよ」

「秋名せんせーはちょっとぐらいの迷惑でイヤな顔するような人がよ？」

「…」じつらは、どうしてこうテンポよくズバズバ言つてくるのだろう。

僕がずっと言わないと決めてた決定的な理由を、たつたの一言ずつであつさりと吹き飛ばしてしまつた。

「なーんだ、俺ずっとつき合えないってわかってるから言わないんだと思つてた」

「俺も」

「あつはつはつは

あつはつはつはじやねーよ…

思いつきり疲れた僕を前に、なんだかだんだん笑いがエスカレートしていくバカども。

「あははははは、あー…腹いてー…」

「あー、涙ってきた…もう何がおかしいんだかわかんねーよ」

「俺も。何で笑つてたんだっけ」

「バカ…

ひとしきり笑い終わるときなりアツが僕に話をふつた。

「で、どうすんだよ」

「いや、だから…」

「つてゆーか、秋名せんせーはノーマークのやつから好きだつて言  
われて嫌がるような人じやねーだろ」

「お前、困らすだの迷惑かけるだの言つて逃げてるだけなんじやね  
ーの？」

また痛いところをズバリとつかれる。

逃げてるだけ。

確かにその通りなのかも、知れない。

何も言えないでいると、拓が急にまじめな顔になつて僕の目を見つ  
めた。

「りょーたあ、俺はお前に俺みたくないって欲しくねーんだよ」

…かつて拓がこんなに真剣な目をしてたことがあつただらうか。  
バカなことしかしないし、言わないやつなのに。

…  
あー…  
あー、もう…

…  
わかつたよ

「おおつ！」

「わかつたか…！」

観念して、言つと。

バカふたりは、心の底からうれしそうに目を輝かせた。

「拓つ、今日はりょーたがオトコになるぞー！」

「おう、しかもオトコはオトコでも『漢』と書いて『おとこ』と読

むめいのなー。」

.....。

ちゅうまつ、ここひなは面白がってるだけなんじやないだろつか?

## 最終話 先生と僕

本当は、僕は。

やつぱり伝えたかったんじゃないだろうか。

渡せるものなんて、何も思いつかないから。

せめて、自分がいたことを、こなじとを、心の中に畳めておいてもらえば。

秋名先生の最後の授業も終わった。  
もつすでに帰りの会。

いつものように笑つてこるナビ、秋名先生はなんだか元気がない。

「えつと……1ヶ月、すぐ早かったです。

3年1組のみんなと過ごさせて本当によかったです。ありがとうございました」

一つ一つ言葉を考えながら、でもあつたたりな言葉しか思いつかない。

なんとなく僕と似てる、なんて思いながら先生の一言一言を聞く。  
学級委員ふたりが、すつと教室を抜ける。

秋名先生はきゅうと口を結んで、うつむいている。

倉沢先生が「今日で秋名先生は最後です」みたいな感じでしゃべる。

こんなに集中して倉沢先生の話をみんなが聞いているのは初めてなんじやないだろ？

しばらくして、学級委員のふたりが戻ってきた。

ひとりは色紙、もうひとりは大きな花束を持って。

「ええ？…」

情けない声を出して、先生が口元を押さえる。

目からは大粒の涙が次々と、ぽろぽろあふれてくる。

やつとのことで色紙と花束を受け取り、先生は顔を上げられなくなってしまった。

「ほんとほんじで『聞こえる』かななんか歌えるといいけどな」

「あつ、うん！歌おう歌おう」

倉沢先生の一言で、今文化祭に向けて練習中の課題曲を歌うことになった。

机をガーッと下げる、簡単に床を掃いて。

みんながここまでテキパキしてゐるのを見たことがなかった。

「だけど、まあ、僕自身も今まで一番テキパキしてたと思つ。

秋名先生はずっとビリビリ顔をして、涙を流しながらなぜか困っていた。

準備が3分ほどで整い、みんなが真剣な表情になる。

今まで散々バカなことばっかやつてた拓也、アツも、そして僕も。いつもひみこり女子も、いつもときはとてもきれいな表情になる。

みんなが指揮者に集中する。

先生の涙はずっと止まらなかつた。

僕たちの歌は今まで一番きれいに響いた。

「…よしつ、りょーたしつかりやれよ」

「最後の一迷惑だぞ」

「…う、うん」

5時55分まで、拓とアツは教室に残つてくれた。  
それで、ここからは僕一人で待つように言われた。

…やつぱり帰ろうかな…

時計の針が進むのが、速いような遅いような。

僕は意味もなく机の中を整理したりして、緊張を必死に解こうとしていた。

ふと、僕の田口あるものが田口離れた。  
理科の、ワーク…

あの時、先生は泣いてた。

それは、間違いない。

泣きながら授業の準備をしてた。

がむしゃらに、何かを考えないよっこり、みたいに…見えた。

…あれは、なんだつたんだ。

もう涙もすっかり乾いた秋名先生が来たのは、僕がそりやつて理科のワークをぱらぱらやってた時だつた。

「菅谷くん、瀧川くんどこにいるか知つてる?なんか呼ばれたんだけど…」

「ああー、アツだつたらもう帰つちゃいましたよ」

「えつ?あれ…?」

秋名先生は、ただ「来い」と言われただけで、ほんとに何も知らされてないみたいだ。

困った顔で「どうしよう…」とか言しながらその辺の机をちょっと直したりなんかしてる。

「先生」

「んー？」

「あんときも、何で泣いてたんすか？」

あつ。  
やべ…

聞くつもつなんかなかったのに。  
無意識つて怖い…

「あんときもつて、あんとき？」

「あ、あの…話したくなかったらいいんですけど」

「うん…あんときもねー…ちよつと落ち込んでた」

秋名先生は少し恥ずかしそうに笑った。

「なんか、みんなと話してるとときはすいじく楽しかったんだけど、授業になると頭真っ白になっちゃつてさ。

谷中先生にもけつじつこりんな」とたたかれりやつて。

それで、落ち込みながら次のところの準備してたときだったから

…

…あの、クソババア。

やつぱり秋名先生のコトにびつてたんだ。

「でも、ありがとう萱谷くん」

「はいー…」

勝手に谷中先生に向かつて怒つてたら、いきなりお礼を言われて。  
感謝する」とはあっても、されることなんか全然ないと思つてたからびつくりして変な声を出してしまつた。

「あつ」ベタイミングよかつたんだよね、萱谷くんの言葉が

「えっ、俺なんか言いましたっけ？」

「うん、私の授業面白いって言つてくれて」

「あ、あー…」

なるほど。

やつと、わかつた。

あのときの先生の涙の理由。

「…俺、好きですよ。先生の…」

「…え？」  
「…あ…」

…口から言葉が勝手に出てきて、言つてから我に返つた。  
先生はすぐびっくりして、大きくて澄んだ目で見つめられると  
かなり焦つてしまつた。

だけど、言ってしまったものは仕方がない。  
僕はとりあえず深呼吸をして。

「いや、すんません、困らせてはいけないからじゃないで、すいしん樂しかったから」

「…………」

「だから、もう会えなくなるなら、最後に言つてしまつて……」

「…………」

先生の大きく見開いた茶色の目の中で、僕がかっこ悪く焦っている。いつもふんわり微笑んでいるピンクの唇が、今はかたく閉ざされている。

やつぱり困りてしまった。

……言わなきもよかったのかも……

そんなことを考えて、僕はいつの間にかつむいてしまっていた。  
軽く握った自分の手が見える。

……と、その僕の手に白い手が重なった。

「…………ありがとうございます。萱谷さんのこと、絶対忘れない」

僕の言葉に、心底うれしそうに顔を輝かせる拓とアツ。

「つよーたよー……それで、お前は『漢』になれたのか？」  
「も言ひづらそうにこんなことを言つてきたアツに、僕は笑つた。  
「『『絶対忘れない』との言葉をいただきましたよ」  
「おおーっ……」  
「漢だ——————！」

秋名先生の実習が終わって、もう1週間たつ。  
週の初めはやっぱり、少し……いや、かなりさみしかったけど。  
少しづつ、先生のいない日々に慣れつつある。  
ものつすじこかつこ悪いんだけど、僕は土田すうと熱を出して寝込んでしまっていた。  
原因は……わかりきってる。  
電話にも出られない状態だったから、拓にもアツにも報告することはできず。  
……それをどんな意味としてとらえたのか知らないけど、今日になら  
までふたりは何も聞いてこなかつた。

…ほんとバカだ。

こいつらが友達でよかつた。

最初の日と最後の日に、僕は秋名先生から『絶対忘れない』って言葉をもらつたわけだけど。

最初と最後じや、『絶対忘れない』理由が秋名先生にとつても変わつていて欲しい。

僕は、今まで高校とか将来の目標なんかがとてもあやふやだつたけど。

なんか、なんとなく、教師を手指そつかなーなんて考えるようになつた自分がいる。

：国語では、ないだらうけど。苦手だから。

あの時見つめた、先生の大きくて茶色い目。

あの時握つた、意外と小さな、白く柔らかい手の感触。

僕は絶対忘れない。

もつ余えなくなるつて言つてはいるけど、余つのが難しくなるだけで絶対会えないわけじやない。

先生は大学生で、僕は中学生で。早生まれの先生だけど、年は5つも離れてて。

だけど、同じ時間の中を生きているのだから。

また、いつか。

そしたら、その時はきっと。  
僕はまた笑顔で秋名先生に会いつつができるだらう。

## 最終話 先生と僕（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました（^ ^）読みづらい部分も多々あったと思いますが、感想をいただけると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5204c/>

---

先生と僕

2010年10月10日01時29分発行